

2020年度 創価大学 入試対策講義 (国語)

一次の文章を読んで、後の問一～八に答えなさい。(2020年度一般入学試験問題 2月7日)

不安とは、さしあたり、意識のはたらきが特定の対象や意味や目的を志向したり、それらにうまく着地したりすることができずに、はたらかせ自身に作用してしまう情緒の状態と規定できる。ところで「現在」というものが、過去からの「由来」と未来への「可能性」とのファダンの出会いの場として構成されるものであるかぎり、それは、何か特定の、固定した、たとえば「直線上の一点」のようなものではない。「現在」とは、むしろたえず流動してやまない時の流れについての実感そのものである。したがって、A人間にとって「現在」とは、「不安であること」以外の何ものでもない。

「現在」とは「不安であること」以外の何ものでもないというこの事実を、人間はみなどこかでわきまえており、自分の生における「現在」を何か具体的なもので満たす必要をいつも感じている。そこで彼は、「由来」と「可能性」とをうまく出会わせる試みにたえず自分を送り込もうとする。その試みによって、「いま、ここに自分があること」がそのつど着地点を見いだし、意味づけられるのである。I

たとえばあなたがだれかと今度の週末に会おうと電話で約束するとき、あなたは一つの「企て」を行っただが、およそ何ごとかを「企てる」ということには、必ずその人にとってのある「由来」が必要条件として含まれている(電話の相手は自分の知人であり、彼と私とはいままで親しくつきあってきた、といったような)。「企てる」にはまた同時に、ある「可能性」が必要条件として含まれている(相手は、約束する必要があると理解してくれるだろうか、そのときまで二人とも元気に生きていて、しかも約束すべき時間と場所は二人の予定にとって適切であろうとかいったような)。この二つの必要条件が出会い、うまく結合することによって、とりあえず、この件に関する意識の不安はとりのぞかれ、「現在」は、あるB「確定した過去」へと送り込まれたのである。II

このように、人は、小さなことから大きなことまで、瞬間的なことから長期にわたることまで、「不安そのものである現在」を、「由来」と「可能性」との結合の企てを通して切り抜け、自分の意識のはたらきのある特定のX性を、たえず一つの「確定した過去」として落착かせようとしている。いまの例でいえば、約束の成立に満足して、それを自分の手帳に記録するとき、約束の実現自体はまだ未来のことに属するが、「約束したという事実」は、あなたにとってすでに過去のものとなっているので、そのかぎりであなただの意識を、あくまで一時的にはあるが安定させるだろう。III

しかしこうした結合の企てが何かの理由で挫折を重ねるとき、「不安そのものである現在」が心身の前面に露呈し、リアルな不安として感じられるようになる。病的な不安、あるいは鬱状態とは、どんな現実的な企てを行っても、「由来」と「可能性」との出会いを実現したというYが得られないために、本来、身体の外や未来に向かうべき意識の志向作用が、対象や目的を喪失してただ空虚な「現在」のうちに空回りするようになった情緒の状態である。

だが、これは要するに程度問題(傍点あり)であって、繰り返すように、もともと健全な状態においても、人間の意識は「不安」としてしかあり得ない本性をもっている。それは、「自己自身に先立ってある存在」として、未知やミイスイをたえず手元に引き寄せることによって自分の現在を構成しようとする。IV いままで述べてきたように、人間の「現在」は、過去についての「可能性」とにフダンに浸透され色づけされたものとしてある。しかしこのことは、一人の人間にとっての時間感覚

が、歴史年表で時の流れをたどるときのように、ただ連綿と過去から未来へつながったウトウカなものとして与えられていることを意味しない。まったく逆に、それは、あるC具体的な節目と濃淡を持ったものとして与えられている。V

「由来」とは単なる過去という概念に一致するものではないし、また「可能性」とは単なる未来という概念に一致するものではない。なぜならば、繰り返すように、人間は時間の無限性の観念を背負っているが、そのことによつてかえつて自分の人生を生涯から死にまで至る限定されたもの、そのかぎりでは「閉じられたもの」として意識せざるを得ないからである。つまり、人間の生は、未来の可能性の極限としての「死」（ハイデガーのいい方では、「自己自身の不可能性という可能性」）によつて根源的に規定されている。

ちなみにいえば、人間が自分の過去に流れた時間を一定の「由来」として総括できるのも、未来に対する有限性の自覚（いつか必ず自分が死ぬという知）によつてこそ可能なことである。というのは、もし私たちが、この自覚を持たず、永遠に生きるとか、刹那刹那をただそのつど生きるという意識しか持っていなかったとしたら、何ヶ月も何年も何十年も前の過去を自分の現在にとつて意味あるものとして意識的な記憶にとどめる何らの必然性も生まれないだろうからである。

（小浜逸郎『人はなぜ働かなくてはならないのか』による。設問の都台上、本文を改めたところがある。）

問一 傍線部ア～ウと同じ漢字を用いるものを、次の各群の選択肢からそれぞれ一つずつ選び、解答欄の記号をマークしなさい。（省略）

- a I
- b II
- c III
- d IV
- e V

問二 本文からは、「したがって」、「不安」は、それがうまく対象や目的に結びつくなら、むしろ自分の生を前に向かって展開させる基本的な動因であるといえるだろう。」という一文が抜き出されている。文中のⅠ～Ⅴのどこにもどしたらよいか。次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 「現在」という時点で、過去からの「由来」と未来への「可能性」が出会える保証はないから。
- b 時はたえず流れており、特定の、固定した一点に着地することはできないから。
- c 「現在」のために何事かを企てたとしても必ずしもうまくいくとは限らないから。
- d 人間は自分の生における「現在」を何か具体的なもので満たす必要に迫られているから。
- e 「現在」とは、過去からの「由来」と未来への「可能性」によつて意味づけられるものだから。

問三 傍線部A「人間にとつて「現在」とは、「不安であること」以外の何ものでもない」理由として、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

問四 傍線部B「確定した過去」に当てはまるものとして、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 今週の週末に会おうと誰かに電話するときの接点
- b 「いまここに自分があること」が意味づけられる着地点
- c だれかと今週末に会うために電話をかけること
- d 「不安そのものである現在」が心身の前面に露呈すること
- e 「由来」と「可能性」をうまく出会わせる試み

問五 文中の空欄Xに入る言葉として、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 流動
- b 可能
- c 志向
- d 実現
- e 論理

問六 文中の空欄Yに入る言葉として、最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 理解
- b 指標
- c 実感
- d 成果
- e 試み

問七 傍線部C「具体的な節目と濃淡を持ったものとして与えられている」とは、どのような意味か。最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 人間は死という節目を意識することで、どう生きるかを決めている。
- b 人間は時間の無限性の観念に基づき、時の流れに節目と濃淡を感じている。
- c 人間はいつか死ぬという有限性の自覚に基づき、時の流れに節目と濃淡を感じている。
- d 人間の時間感覚は過去の「由来」に基づき、現在にとって意味あるものかどうかを決めている。
- e 人生を生涯から死に至る限定されたものと意識する上で、意味ある過去のみが記憶に残される。

問八

本文の内容の説明として最も適切なものを次の選択肢から一つ選び、解答欄の記号をマークしなさい。

- a 未来についての「可能性」の極限が死であるからこそ、人間は過去を「由来」として総括できる。
- b 人間にとっての「現在」は、過去についての「由来」と未来についての「可能性」が出会う時点と定義できる。
- c 人間にとっての「現在」が不安なのは、時間は無限だがその中で永遠に生きることとはできないと理解しているからである。
- d 過去の「由来」と未来の「可能性」の出会いを実現する現実的な企てを行えば、「現在」の不安は取り除かれる。
- e 刹那刹那をただそのつど生きるのであれば、過去についての「由来」も未来についての「可能性」も必要ない。

《課題文の整理例》

◆問三・問四パート

□不安とは、さしあたり、意識のはたらきが特定の対象や意味や目的を志向したり、それらにうまく着地したりすることができずに、はたらかせ自身に作用してしまう情緒の状態と規定できる。ところで「現在」というものが、過去からの「由来」と未来への「可能性」とのファダンの出会いの場として構成されるものであるかぎり、それは、何か特定の、固定した、たとえば「直線上の一点」のようなものではない。「現在」とは、むしろたえず流動してやまない時の流れについての実感そのものである。したがって、人間にとって「現在」とは、「不安であること」以外の何ものでもない。

□「現在」とは「不安であること」以外の何ものでもないというこの事実を、人間はみなどこかでわきまえており、自分の生における「現在」を何か具体的なもので満たす必要をいつも感じている。そこで彼は、「由来」と「可能性」とをうまく出会わせる試みにたえず自分を送り込もうとする。その試みによって、「いま、ここに自分があること」がそのつど着地点を見いだし、意味づけられるのである。I

← (例示)

□たとえばあなたがだれかと今度の週末に会おうと電話で約束するとき、あなたは一つの「企て」を行ったのだが、およそ何ごとかを「企てる」ということには、必ずその人にとつてのある「由来」が必要条件として含まれている（電話の相手は自分の知人であり、彼と私とはいままで親しくつきあってきた、といったような）。「企てる」にはまた同時に、ある「可能性」が必要条件として含まれている（相手は、約束する必要を理解してくれるだろうとか、そのときまで二人とも元気に生きていて、しかも約束すべき時間と場所は二人の予定にとつて適切であろうとかいったような）。この二つの必要条件が出会い、うまく結合することによって、とりあえず、この件に関する意識の不安はとりのぞかれ、「現在」は、あるB「確定した過去」へと送り込まれたのである。II

◆問五・問六パート

□このように、人は、小さなことから大きなことまで、瞬間的なことから長期にわたることまで、「不安そのものである現在」を、「由来」と「可能性」との結合の企てを通して切り抜け、自分の意識のはたらきのある特定のX性を、たえず一つの「確定した過去」として落착させようとしている。いまの例でいえば、約束の成立に満足して、それを自分の手帳に記録するとき、約束の実現自体はまだ未来のことと属するが、「約束したという事実」は、あなたにとつてすでに過去のものとなっているので、そのかぎりでああなたの意識を、あくまで一時的にはあるが安定させるだろう。III

台 (対比)

□しかしこうした結合の企てが何かの理由で挫折を重ねるとき、「不安そのものである現在」が心身の前面に露呈し、リアルな不安として感じられるようになる。病的な不安、あるいは鬱状態とは、どんな現実的な企てを行っても、「由来」と「可能性」との出会いを実現したというYが得られないために、本来、身体の外や未来に向かうべき意識の志向作用が、対象や目的を喪失してただ空虚な「現在」のうちに空回りするようになった情緒の状態である。

◆問七パート

〔六〕だが、これは要するに程度問題であって、繰り返すように、**もともと健全な状態においても、人間の意識は「不安」としてしかあり得ない本性をもっている**。それは、「自己自身に先立ってある存在」として、未知やミイスイをたえず手元に引き寄せることによって自分の現在を構成しようとする。IV

〔七〕いままで述べてきたように、人間の「現在」は、過去についての「由来」と未来についての「可能性」とにフダンに浸透され色づけされたものとしてある。しかしこのことは、一人の人間にとっての時間感覚が、歴史年表で時の流れをたどるときのように、ただ連綿と過去から未来へつながったウトウカなものとして与えられていることを意味しない。まったく逆に、それは、あるC**具体的な節目と濃淡を持ったもの**として与えられている。V

〔八〕「由来」とは単なる過去という概念に一致するものではないし、また「可能性」とは単なる未来という概念に一致するものではない。なぜならば、繰り返すように、人間は時間の無限性の観念を背負っているが、そのことによってかえって自分の人生を生誕から死にまで至る限定されたもの、そのかぎりでは「閉じられたもの」として意識せざるを得ないからである。つまり、**人間の生は、未来の可能性の極限としての「死」（ハイデガーのいい方では、「自己自身の不可能性という可能性」）によって根源的に規定されている**。

〔九〕ちなみにいえば、人間が自分の過去に流れた時間を一定の「由来」として総括できるのも、未来に対する**有限性の自覚（いつか必ず自分が死ぬという知）**によってこそ可能なことである。というのは、もし私たちが、この自覚を持たず、永遠に生きるとか、刹那刹那をただそのつど生きるという意識しか持っていなかったとしたら、何ヶ月も何年も何十年も前の過去を自分の現在にとって意味あるものとして意識的な記憶にとどめる何らの必然性も生まれまいだろうからである。

《参考 今年度の知識問題》

「身体ではなく心の核が標準より硬いことをじゅうぶんに意識してそれを見せたがる人を、世間はときに、高慢だ、Y、と否定的に評する。」

問三 空欄

Yに入る表現として最も適切なものを、次の選択肢から一つ選び、解答欄の番号をマークしなさい。（全学統一試験）

- a 目を疑う
- b 鼻持ちならない
- c 耳が痛い
- d 身につまされる
- e 手に負えない

創価大学入試(国語)の傾向と対策

【出題の傾向】

- ・ 60分3題、**一般人試A**（大学入学共通テスト利用入試）は現現古または現現漢で採点されるが、その他の日程の**大学独自問題**は現代文のみ。課題文および選択肢は短い。
- ・ **2021年度一般人試B**（ハイブリッド型入試）では複数の記述式問題（要約・理由説明・抜き出しなど）が設けられる予定。

・ 漢字・口語文法・慣用句・語義問題など、知識問題の出題がある。

・ 客観問題の解法の十分な理解が必要。

2020年度の出題く段落区分問題・内容説明問題・空欄補充問題・趣旨一致問題・脱文挿入問題

【対策】

・ 文章の要点に傍線を付し、趣旨と論構造を整理する。

・ 要点を確認し、各設問の根拠を文中から見出す。

※要点となる部分

各段落の先頭・最後の文||トピック・センテンス

キーワード||対になったり、繰り返されたりすることは

設問を含む文、設問前後の文

疑問文・表題

・ 選択肢を吟味するポイントをよく理解する。

※誤答のパターン

キーワードが逆である

主語・目的語関係が崩れている

前提・結果関係が崩れている

部分否定と全否定を取り違えている

本文逸脱している

事前の修飾部分や条件が誤っている

【参考】脱文挿入問題の解法

手がかりは〈指示語・接続詞・キーワード〉など、前後関係を規定する表現

1. 挿入文の手がかりく直前の文脈との論理関係

2. 記号直後の部分の手がかりく直後の文脈との論理関係

【入試までの学習での注意点】

- ・ 常用漢字・口語文法・慣用句・故事成語・四字熟語をドリルする。
- ・ 空欄補充問題・段落区分問題・脱文挿入問題など、客観問題の解法をマスターしておく。
- ・ **公募推薦入試も含め、過去問をダウンロードして十分に練習しておく。**
- ・ 共通テスト利用入試を受験する人は、共通テスト型の準備（ことに古文・漢文）の準備をしておく。